

りんどう

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
葉枯病	—	並	(1) 6月下旬の巡回調査での発生圃場率は、平年並だった。(±) (2) 7月の降水量はほぼ平年並の予報。(±)
褐斑病	—	多	(1) 前年の発生量は、平年より多かった。(++) (2) 7月の降水量はほぼ平年並の予報。(±)
ハダニ類	—	やや多	(1) 6月下旬の巡回調査での発生圃場率は、平年並だった。(±) (2) 7月の気温は高い予報。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

○褐斑病の重点防除時期は6月下旬から7月下旬です。効果の高い薬剤で予防散布を徹底しましょう。

【共通事項】

- (1) 7月は、葉枯病、褐斑病の重点防除時期にあたるので、散布間隔が空かないようにする。
- (2) 収穫が終了した品種は病害虫の発生源となるので、収穫前品種とあわせて防除を継続する。

【褐斑病】

- (1) 梅雨期に一次感染し、7月下旬～8月上旬頃に初発生がみられる。発病葉は二次伝染源となる。前年発生が見られた圃場では今年も発生しやすい。
- (2) 株仕立てが不十分であったり、風通しが悪い圃場では発生が多くなるので、適正な茎数に管理する。
- (3) 下位葉や畝の内部など薬剤が到達しにくい場所や、畝の北側の日当たりの悪い場所などで発生が多く見られることから、薬液が株全体に十分かかるように散布する。
- (4) 被害の拡大と翌年の伝染源をなくすため、被害茎葉は取り除いて圃場外へ運び出し、土中に埋めるなどして処分する。

【葉枯病】

- (1) 降雨後の散布は効果が劣るので、週間天気予報を参考にして、降雨日前の散布を心掛ける。
- (2) 薬剤散布にあたっては、下葉や畦の内部にもよくかかるように散布する。
- (3) 弱小茎やこぼれ種から生じた茎葉は伝染源となるので抜き取り、土中に埋めるなどして処分する。

【炭疽病】

- (1) 被害茎葉は、取り除いて圃場外へ運び出し、土中に埋めるなどして処分する。
- (2) ニセアカシアは本病の伝染源になるため、圃場周辺にある場合は特に防除を徹底する。

【黒斑病】

- (1) 感染開始時期は入梅期（7月上旬）であり、フラワーネット等により生じた葉の傷口から感染する。
- (2) 7月に発生した株では採花部で発生しやすい。梅雨期に発生すると着蕾期の薬剤防除だけでは発生を抑えることが困難になることから、速やかに効果の高い薬剤を茎葉散布する。
- (3) 草勢の弱い株で発生しやすいので、夏期の草勢を確保するため、降雨後に通路が湛水しないよう排水対策を併せて講じる。

【ハダニ類】

- (1) 多発してからでは防除が困難となるので、前年多発圃場や常発圃場では葉裏を観察し、発生初期に防除する。なお、散布時は葉裏に薬液が十分かかるようにする。
- (2) 体色が赤色のカンザワハダニと半透明のナミハダニが寄生するが、後者は特に見落としやすいので注意して観察する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (4) 雑草はハダニ類の発生源となるので除草し、圃場外へ運び出す。

【リンドウホソハマキ】

- (1) 被害が多い圃場では、今後も防除を継続する。
- (2) 被害茎は見つけ次第折り取り処分する（図1～3）。



図1 被害茎



図2 被害茎の着色と羽化孔

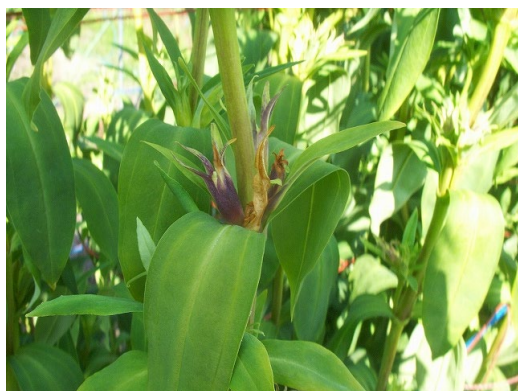


図3 被害花蕾の着色

【アザミウマ類】

- (1) りんどうの開花とともに成虫が飛来し増殖するので、蕾の着色が見られたら薬剤防除を行う。
- (2) 収穫が終了した品種が発生源となるので、収穫後の残花や不要な茎葉を折り取り、圃場外に持ち出す。
- (3) 周辺の開花した雑草はアザミウマ類の増殖源となるので除草し、圃場外へ運び出す。